



# おじさんズ通信

2024年7月号 (No.44)

発行元：登別市新生町  
桃柿通 緑風舎  
発行者：おじさんズ3号



発行は毎月15日頃。バックナンバーは右のQRコードからどうぞ。



## 映写機とジューク・ボックス

6月末、久しぶりに室蘭市陣屋町にある市の民俗資料館に足を運びました。30年ほど前に寄贈したジューク・ボックスとの再会と、「もう一度行ってみたい」という家族のリクエストから、タイヤを転がしました。ジューク・ボックスなどは、今の若い人にとってナニ？ソレの代物でしょう。そして、こちらがナニ？コレと注目したのは、年代物映写機の丸いノブに書かれた警告文字でした。探ると「へえ～、なるほど」と学ぶべき歴史知識多々あり。まだ行かれた事のない方、おすすめの「歴史探索スポット」です。

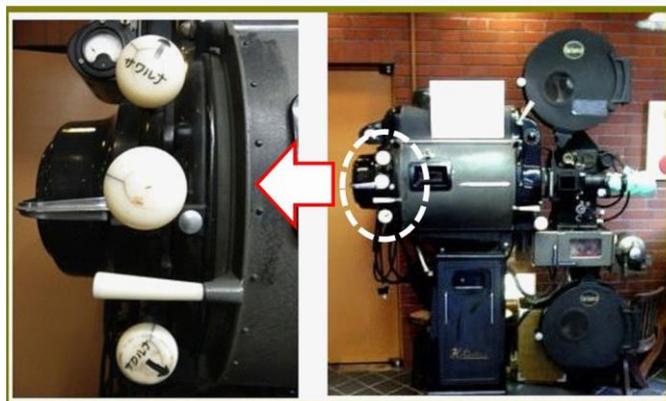
### 「サウルナ」の謎

1階ロビーに展示されている35mm映写機は、昭和30年代に「輪西大盛館」（昭和50年に廃館）で使われていたもので、2本の炭素棒（アーク棒）を電極にして電気を流し、電極間に生じる白熱光を光源にして映画フィルムを投影していたとか。

問題は機器の後部に取り付けられた3個のノブのうち、上下2個に記された「サウルナ」の警告文字です。上映前、このノブを回して何かを調整したんでしょうね。そこで、札幌機材博物館のY館長にメールで問い合わせたところ、判明しました。

上のノブはアーク棒の上下位置調整用、下は左右位置調整用とか。ちなみに真ん中のノブは+と-電極の間隔調整用とか。ネットで調べると、炭素棒1本の燃焼時間は約7分程度しかありません。2台の映写機を交互に使い、フィルムのセットとアーク棒の交換作業に、立ち働く映写技師は大忙しだったことでしょう。

ここで、ちょっとした疑問が浮かびます。「サウルナ」の文字と、定位置らしきものを指し示す矢印は、誰が誰のために記したのでしょうか。ひょっとして、上映中に見習い技師が手を触れてトラブルが発生！「ええい、このシルシが目に入らぬか、バカモン」と見習い君をとがめる、黄門主任のどなり声が聞こえてきそうです。



### レコード自動演奏箱



硬貨を投入して、かけたい曲名ボタンを押すと箱の中で、選曲したドーナツ盤レコードのプレイヤー演奏が始まる。アメリカで生まれたジューク・ボックスの歴史は1889年に始まるとか。映画に出てくるような昔の安酒場（Juke）におかれていたから、この名が付けられたといえます。

「とんてん館」が愛称の同館1階の収蔵庫奥に、海岸町の義父宅にあった、その「レコード自動演奏箱」（左上写真）はありました。住んでいたビルの解体も近づき、故障もしていたので同館への寄贈と相成りましたが、その後を職員さんに聞いてみると、プレイヤーなどの駆動部などは腐食していたために取り外されました。見方によってはただの「箱」ですが、80個ある選曲ボタンのラベルに目を落とすと、懐かしいじゃありませんか。「アッと驚く為五郎」（植木ひとし）、「喧嘩のあとで口づけを」（いしだあゆみ）「経験」（辺見マリ）「池袋の夜」（青江美奈）など、1970年前後に生まれた歌謡曲や「ドーター・オブ・ダークネス」（トム・ジョーンズ）といった洋楽レコードも収められていたようです。

なんとか改造して、音の出る仕掛けにしたいもの。札幌のY館長なら多分、やっつけるでしょうが、高かつきそうです。

### 特別展

与謝野晶子や土井晩翠、大町桂月、市川左団次、尾崎行雄らのサイン、書画などが出会いを待っています

### 登別温泉に行ってきました～大正・昭和の著名人～

会場：登別市郷土資料館 期間：7月20日～10月14日  
入館料：大人190円 小・中学生60円

## 写真がチョコに化けた話

幼いころから洋画を見まくって英語を覚えたという映画評論家・淀川長治さんの、太平洋戦争中と終戦直後のエピソードです。

空襲警報が鳴ると、何はさておきアメリカ映画のスタイル写真を詰めた小箱を抱え、防空壕に逃げ込んだという淀川さん。キーンと音をたてて近くに落ち、炸裂する焼夷弾の光が、庭の木影を動かすのを見て「私はルイス・マイルトォン監督の『西部戦線異状なし』が目についた」と語っています。

そして終戦一。横浜・鶴見の自宅で米国女優のスタイル写真を見せられた米兵4人が、日曜日ごとにやってきては、グリア・ガースン（「チップス先生さようなら」主演）の写真の奪い合いになったとか。

「そこで私は『一番チョコレートをたくさん持ってきた人にあげよう』と冗談をいった」

すると、これを真に受けた一人がその晩、こっそり



やって来て、上着の胸やポケットからチョコレートの箱を取り出し、「今度は私が叫び声をあげてグリア・ガースンを彼に手渡したのだった」。

「キネマ旬報」1983年10月上旬号に掲載された「淀川長治自伝」からの拾い読みですが、いくら東宝の社員だったとはいえ、敵国の俳優写真を大量に所持していることがバレたら、どうなっていたことやら。しかし、4人の米兵が口にした戦争の非情な現実、胸をつくものがあります。

「丘の上から日本兵を撃ちながら、心のうちで来るな、来るなと願っているのに、なおも迫って来るので目をつむって撃ちまくった」

「レッドはただ戦争は嫌いだと、それだけ云って口をつぐんでしまった」

「落下傘で落ちたところにまだ日本兵がいたので、殺されると思ったが、日本兵は走り去った」

淀川さんがその時かみしめたチョコの味は、今とは比べものにならない程に甘くも苦い切ないものだったに違いありません。8月15日が近づくとつれ、私にとっては「戦後は続くよ、いつまでも」であります。

## ドガが一步身近に

地元文芸誌への投稿前に、書き上げた創作に目を通してもらっている読書家のG氏が、「誰かの文章に似ている」と何度か首をかしげた後、「そうだ、○●□■だ」と、足元にもはるか及ばない有名女性作家の名前を挙げました。

勧められた彼女の作品を読みましたが、ボンクラ創作人には、どこが似ているのかチンプンカンプンです。文体が似ているなんて、とても、とても。

ですが、最近読んだこの方の小説が、身近にある文庫本「世界 名画の旅1フランス編」（朝日新聞日曜版）の表紙絵と結び付き、ピカッとアーク放電しました。その絵画は印象派エドガー・ドガの「エトワールまたは舞台の踊り子」。絵画ファンでなくとも、皆さん、一度は目にしたことがあるのでは。

改めて、この絵を目に焼き付け、再度、小説を読み直すと作品が生まれた時代背景や画家の執念がさらに深く、心に刻まれる次第です。

### 名言・珍言

すべてのインテリは、東芝扇風機のプロペラのようだ。まわってはいるけれど、前進しない。

（寺山修司「あゝ荒野」）

### 薫風 烈風

▶つい先日、室蘭半島の突端、絵鞆岬の展望台を訪ねました。この日は好天に恵まれ、波に洗われる眼下の岩礁地帯や大黒島、恵比寿島、そして白鳥湾を仕切る赤防・白防灯台などもクッキリ望むことができました。そしてカモメだけでなく、イワツバメやトンボが飛び交い、穏やかな風景に緩急自在の動線を描いては消し去ります。

家族と話しているうちに、このパノラマの中に音はいくつ存在するだろうか？ と思い、数えてみました。

波の音、港外に出ていく貨物船や遊漁船のエンジン音、カモメの鳴き声……まだあるぞ、風のささやきや観光道路を走る車の音、遠くに聞こえる工場の音などなど。耳を澄ませば、もっとあるのかもしれない。

そして150年余り前の開拓秘話を思い浮かべました。幌別郡を支配していた片倉家の旧臣たちが、みゆき町の高台から一鶏一狗鳴かぬ半島先端の、この地まで踏み分け道を開いた話です。それを題材にした拙作、近日発行の「文芸のぼりべつで」に掲載予定。御一読くだされば幸い。それでは、皆さん、お元気で～。

